

## 第4回測器観測法委員会 (CIMO-IV) を終えて\*

竹 内 清 秀\*\*

### 1. はしがき

本年10月はじめの2週間、世界気象機関(WMO)の第4回測器観測法委員会(CIMO-IV)が多数の各国代表の出席のうちに開催され、また、これに引きつづき3日間、技術講演会が開かれた。気象庁としては、この種の国際会議は初めてのことであり、準備委員会などを設けて半年以上も以前からその受け入れ態勢を整えて来た。いま、招請国として無事その責任を果たすことができ、関係者一同、肩の荷を下ろした感じである。会議の概要についてのべる。

### 2. 会議のあらまし

#### 2.1 期間および場所

正式会議 昭和40年10月4日—16日

高輪プリンスホテル

技術講演会 昭和40年10月18日—20日

気象庁

#### 2.2 参加者など

参加した国 25カ国

その代表 62名

参加した国際機関 5機関、7名(WMOを含む)

日本からは吉武気象庁観測部長を主席代表として、アドバイザー、エキスパートを含む13名が参加した。

#### 2.3 議題

前もって提出された議題は28項目に分類されている。それを大きく分けると、

- (1) 地上用の測器ならびに観測法(飛行場を含む)
- (2) 高層用の測器ならびに観測法
- (3) 気象レーダーに関する事
- (4) その他、会議運営などに関する事

#### 2.4 会議の進め方

会議は総会と委員会とに分けられる。委員会はAおよびBの2つからなっており、A委員会では主に地上に関する事、B委員会では主に高層に関する事が討論された。委員会が得た結果は総会に提出され議決

された。

使用される言葉は国際会議の例として国際的に認められた国語を2つ以上使用することになっているが、この会議では英仏語が使用された。つまり、英語あるいはフランス語による発言は同時通訳者によりそれぞれフランス語、英語に通訳される。議場の代表者は無線受信器を各自持っていて、自分の選ぶ国語にダイヤルを合わせておけば、それが常に聞かれるようになっている。また文書も英仏両国語で提出される。なお、わが国で開催される会議であるので、日本語でも発言の内容がわかるように、英仏語を日本語に同時通訳する設備も作られた(口絵写真1参照)。

### 3. 開会式

各代表の登録に続いて10月4日開会式が開かれた。Mathur CIMO 委員長の開会の辞に始まり、柴田気象庁長官、星外務省国連局長、Langlo WMO 事務局代表、Herbin 国連東京広報センター代表、Mathur CIMO 委員長の挨拶があり、これに対して吉武日本側事務局長の感謝の言葉があつて式は終わった(口絵写真2参照)。会場正面には参加各国の国旗が立てられ、また正面には同時通訳の小部屋が見られ国際会議にふさわしいふんいきがこもり出された。

### 4. 総会

開会式に続き第1回の総会が開催された。これまで欠員になっていた副委員長の選出があり、吉武日本主席代表が選ばれた。議題の採択、前述のA、B委員会の設立およびそれぞれの委員会の司会者すなわち Hinzpeter 博士および Rockney 氏の選出が行なわれた(口絵写真3参照)。

前述のように、A、B委員会で討論された結果は、会議の終りの方で開かれた総会にかけられた。そこで正式の議決が行なわれ、今回の委員会では23の決議と11の勧告がなされた。つまり細目について、作業を進めて行くためのワーキング・グループや調査報告をするためのラポーターなどが設立された。

なお、次期の委員長と副委員長が選出された。委員長には Mathur 博士が再選され、副委員長には Rockney

\* On CIMO-IV, Tokyo, 1965

\*\* K. Takeuchi, 気象庁観測部測器課

氏が選ばれた。

##### 5. 議題などについて

提出された議題の数は大きくわけて28であったが、その主なものは次のようである。降水、蒸発、気温および湿度、気圧計の比較、飛行場における測器および観測法、気象レーダー、放射、高層観測（ラジオゾンデ、商船を利用した風の観測、ドロップゾンデ、気象ロケットなどが含まれる）、波長割りあて、空中電気、下層対流圏探測、観測精度、準器、測器の開発、測器の比較、大気放射能、南極観測、気象測器観測法の手引、技術規定、CIMOの分掌内容、測器観測の研修など非常に広範囲にわたった。

特に今回の委員会の中心課題というべきものは、観測の範囲を水平方向にも鉛直方向にも一層拡大することであったと思われる。つまり、これまで洋上の観測が非常に欠けているのに対して何とか方策を立てなければならない。商船や商業飛行機を利用すること、ロケット、人工衛星を気象観測にもっと利用することが真剣に考えられた。なお、これらに対して具体的な活動をするためにエグゼクティブ・ワーキンググループが作られた。これは委員長、副委員長、吉武日本主席代表、英仏代表などで構成されている。今後の活躍が期待される。

##### 6. 技術講演会、測器展示会

正式会議が終わった後、引き続き技術講演会が開かれた。その主題は、ラジオゾンデによる高層観測、気象ロケットおよび気象衛星の種々の装置および気象レーダーに分けられる。3日間にわたって熱心な討論が行なわれたが、今後の気象測器の進むべき方向を示しているように思われた（口絵写真4参照）。

会議の期間中、約10日間にわたって気象測器の展示会が気象庁講堂で行なわれた。約30社、約200点の種々の測器がわが国の進歩した現状を各国代表に示した。普通露場で使用しているものから、気象ロケットや超音波風速計などの新しいものにまで及んだ（口絵写真5参照）。

##### 7. おわりに

半月以上にわたる国際会議を無事終了することができて本当に喜ばしい。天候にもめぐまれ、日光へのエキスカッション、都内観光など外国の代表は日本の秋を十分に満喫されたと思う（口絵写真6参照）。柴田長官夫妻のレセプション、吉武日本側事務局長夫妻のサヨナラパーティーなど、そのもてなしにも感謝の言葉を惜まなかった。

これを機会に、わが国の気象測器観測法の方面に今後とも世界的視野で一層貢献することを期待したい。

## C I M O こ ほ れ 話

CIMO (390p 記事参照) の各国代表は気象台関係者が大部分であったが、変り種は Finland 代表であった。首席代表 Vaisala 氏はヘルシンキ大学の教授であるが、世界27カ国で使われているパイサラゾンデの製作会社、パイサラカンパニの社長でもある。氏は長年フィンランドの高層気象観測の発展に尽し、また軽量安価で簡便（精度もよいという）なラジオゾンデの普及に努力し、

母国の外貨獲得にも大いに貢献しているようである（年産50000台）。氏ともう一人の代表 Toivola 氏（パイサラカンパニ）は気象庁に長官を訪ね、CIMO 期間中に受けた歓待に謝意を表し、フィンランドの高層気象学会のパイサラ記念メダルを贈呈した。このメダルはフィンランド国外では4人しか所持していないとのことであった。（関口理郎）